

聖廟で春季積菜を厳かに開催

脈々と受け継がれる伝統と、地域一体で支える式典

孔子の遺徳を偲ぶ春季積菜が4月18日、多久聖廟で行われました。今年は孔子の教えを形にした「宥坐之器」の贈呈式も行われ、県内外から多くの来場者で賑わいました。

式典では、伶人が奏でる雅楽の中で、献官の横尾市長や市議会議長、教育長、小中学校長など祭官が孔子様に甘酒、餅などのお供え物を奉納。

式典後、聖廟境内では西溪中の生徒による『積菜の舞』、西溪小1〜5年生と、多久町老人クラブが揚琴演奏



▲聖廟境内に入場した祭官ら



▲漢詩を読み上げる祭官



▲優美な「積菜の舞」



▲参列生徒の唱歌



▶躍動感あふれる腰鼓



▲東原席舎にて開催されたお呈茶

奏家 趙勇さんの揚琴の音色に合わせ、『参列生徒の唱歌』を合唱。仰高門前では、鮮やかな衣装の西溪小6年生が『腰鼓』を披露しました。趙勇さんの演奏では、『早春賦』、『花』、『夏の思い出』などが披露され、懐かしい音色に来場者も口ずさんでいました。

東原席舎では、多久市文化連盟茶道会によるお呈茶もあり、広島県からの来場者は「今回始めて参加しました。秋の積菜にも訪れたいですね」と話していました。

「宥坐之器贈呈式」

今回の積菜では、孔子が説いた中庸の徳、謙讓の徳を形にした「宥坐之器」の贈呈式が行われました。

宥坐之器とは、銅板製で、高さは210cmで、幅は133cm。水を入れる器は、水、器の重さそして器を支える支点が揃い、空の状態では傾き、ほどよく水を入れていくと水平を保つように作られています。

製作者の針生清司さんは、群馬県在住で板金加工業を営まれ、「現代の名工」に選ばれています。式では、「数年前に曲阜市を訪れ、孔子研究院の紹介で多久を知りました。今回念願叶って贈呈に至りました」とあいさつ。式典後には、多くの来場者が宥坐之器を体験する姿がありました。



▶針生清司さん

市長はじめ関係者が参加して行われた除幕式（写真右上）除幕式後、宥坐之器を体験する来場者のみなさん（写真右下）

市長コラム

温故創新

Message for citizen

「宥坐之器」の教え

市長 横尾俊彦

小中一貫校の開校式、スクールバス出発式で新年度が始まりました。子どもたちの未来のため、文教都市・多久を向上せねばと決意を強くしました。児童・生徒代表の「歴史的瞬間に立ち会える誇りを持ち、良く学び、立派な人になるよう努めます」の決意表明は心への実に大きな響きでした。春といえば、多久聖廟の春季積菜も無事に挙行できました。特に今回は「宥坐之器」の贈呈を受け、参詣の皆様にご披露できました。

宥坐之器は、孔子の教訓にある「中庸」の教えを誰にもわかるようにつくられた器です。皇帝も座右において自戒としたそうです。内側に水を貯める訳ですが、不足していると傾き、丁度良ければ見事に立ち、多過ぎれば覆るといふ器です。

製造して寄贈いただいたのは群馬県館林市在住の銅司針生清司先生です。

先生によれば、古来より伝わる文献に記録はあるものの、実物は現存しないと知り、「ならば自分がつくろう」と一念発起され、13年の歳月を経て完成されたそうです。銅の厚み、形状、容量、バランスなど、その時々々にドラマチックな発見や気づきがあり、それを喜々として語られました。

孔子生誕地・曲阜の孔子研究院に奉納した際に「多久には納められましたか」と孔副委員長に尋ねられ、その日以来、多久聖廟へ奉納を念願されたのでした。「悲願叶い嬉しい」と針生先生。

真に有難いご厚情とご貢献です。その思いと中庸の教えを心に刻み、教育を高めていきます。